

平成 26 年度 ADCA セミナー

「国際協力への第一歩

～未来のグローバル人材に求められるスキル～」

結果報告書

平成 26 年 10 月

一般社団法人海外農業開発コンサルタント協会

1. 概要と目的

現在世界人口の 60%以上が農業に従事しており、開発途上国では貧困層の 4 人のうち 3 人が農村地域に居住し、生計を農業に依存しております。更に人口の増加や気候変動などに起因する環境問題やガバナンスなどこうした地域で取り組むべき問題も複雑化・多様化しております。また近年ではエネルギー生産への穀物利用の拡大から穀物価格が高騰し、世界の食料事情が厳しい状況になりつつあります。これらの厳しい事情に対応するべく、我が国の開発途上国への政府開発援助（ODA）の基本方針は、貧困削減のための農業・農村開発分野の協力を重視しており、生産力向上などの農業農村開発を効果的・効率的に実施するために、開発途上国の政策や援助需要を踏まえつつ、我が国の経済社会発展や経済協力の経験を途上国の開発に役立てるとともに、我が国が有する優れた技術、知見、人材及び制度を活用し、貧困削減についてのプログラムを展開しております。

弊協会では毎年世界の農業農村開発の展開について国際協力の関係者（JICA 等国际協力実施機関、大学等研究機関、コンサルタント、ゼネコン、NGO 等）と今後の可能性、方向性について、我が国の農業農村開発協力の実績を振り返りながら、共に考える事を目的にセミナーを開催してきました。これまで、東京大学（平成 22 年）北海道大学（23 年）、九州大学（24 年）および鳥取大学（25 年）において第一線で活躍する農業農村開発のプロフェッショナルを招きご講演をいただいております。

このセミナーでは、国際協力に従事する様々なプレーヤーが存在する中、開発途上国において農業・農村開発に従事する人材の活動実態を正しく社会に発信し、次世代のグローバル人材となり得る皆さまに国際協力への第一歩を踏み出すきっかけ作りをすることを目指しています。また、講演や協力事例報告、パネルディスカッションを通じて、世界における農業や食料事情を提供し、我が国の ODA における農業農村開発への理解を促進させることを目的としています。

2. 開催日時

平成 26 年 9 月 27 日（土）13：15～17：00（会場受付開始 13：00）

3. 開催場所

日本大学生物資源科学部 本館 4 階大講堂
〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

4. 対象

農業・農村開発、工学、社会科学系に興味を持つ学生および、技術者（民間企業、地方公共団体）

5. 主催者

一般社団法人海外農業開発コンサルタント協会（ADCA）

6. 共催者

日本大学生物資源科学部

7. 後援者

農林水産省、独立行政法人 国際協力機構、公益社団法人 農業農村工学会

8. プログラム

- 13：15－13：20 開会挨拶 久野 格彦 海外農業開発コンサルタント協会 副会長
13：20－13：25 共催者挨拶 河野 英一 日本大学生物資源科学部 学部長
13：25－13：30 来賓挨拶 宮崎 雅夫 農林水産省 農村振興局 整備部 設計課
海外土地改良技術室 室長

第 1 部 講演

- 13：30－14：20 基調講演 「世界の食料問題と FAO の役割」
ボリコ・M・チャールズ
国際連合食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所 所長
14：20－14：50 講演 「後輩諸君へのメッセージ：国際協力への第一歩」
岩本 彰
NTC インターナショナル 代表取締役社長

— 休憩 — （15分）

第 2 部 現場からの報告

- 15：05－15：25 「ザンビア国小規模灌漑開発プロジェクト」～農業農村開発分野における
開発コンサルタントの取り組み事例～（ビデオ出演）
家泉 達也
三祐コンサルタント 海外事業本部 執行役員 技術担当
15：25－15：45 「国際協力の仕事を目指して思っていた事。」
栗原 一寿
国際協力機構（JICA）カメルーン国専門家 陸稲栽培

— 休憩・パネル展示・学生個別相談 — （20分）

第 3 部 パネルディスカッション

- 16：05－16：55 パネルディスカッション
パネリスト：
倉内 伸幸 日本大学生物資源科学部 教授
石垣 真奈 アイ・シー・ネット コンサルタント事業部
弘重 秀樹 オリエンタルコンサルタント GC 事業本部 農業水資源部
農業・農村開発グループ 課長

椎本 ゆかり 日本工営 コンサルタント海外事業本部 環境事業部 地域整備部

モデレーター：

西牧 隆壯 東京農業大学 客員教授

16：55－17：00 閉会挨拶 永友 紀章 国際協力機構 農村開発部 次長
(農業・農村開発第一グループ長)

17：00－17：30 パネル展示・学生個別相談

9. 参加人数

391名

10. 成果

【基調講演】

「世界の食料問題と FAO の役割」

ボリコ・M・チャールズ (FAO 駐日連絡事務所)

第 1 部ではまず FAO 駐日連絡事務所長のボリコ氏が講演を行った。講演は以下の四演題に沿って進められた。

①国連システムとその中の FAO

UNICEF、UNDP など多くの組織は国連事務局の下の組織であるが、FAO は WHO、UNESCO 等と同様に事務局から独立した専門機関として活動している。FAO の設立は 1945 年の 10 月 16 日であり、現在の世界食糧デーとなっている。

②FAO の活動

基礎的活動と現場支援活動の二つに分けられ、前者は情報収集・分析・提供、政策提言、中立的討論の場の提供であり、後者は農業技術の指導、復興支援、国境を越える病虫害の予防である。

③世界の食糧問題

食料なしでは誰も生存できないことから、食糧問題は全てに事柄に通じる。私達に出来ることとして、興味を持つこと、ロスを減らすこと、活動を支援すること、国際協力をするところがある。

④FAO を仕事にするために必要なこと

A. 学歴 (修士以上)、B. 国連公用語の習得、C. 職務経験、が重要である。また日本人特有の課題として、A. Modesty、B. Perseverance、C. Self Confidence が挙げられる。

【講演】

「後輩諸君へのメッセージ：国際協力への第一歩」

岩本 彰 (NTC インターナショナル株式会社)

第1部後半では NTC インターナショナル代表取締役社長岩本氏が講演を行った。

講演タイトルからも明らかなように、岩本社長は日本大学で学士及び修士の2つの学位を取得されているため、先輩として温かな視線で後輩達を見つめながらお話をされた。講演内容は国際協力コンサルタントを志された経緯や国内事業部から突如海外事業部に配属され、その後アジア・中南米・アフリカ地域等世界各国で農業・農村開発に係る技術協力に携われたこと、また日本の途上国に対する農業・農村開発の変遷、さらに岩本社長が業務に取り込まれる上で常に心に留め大切にされている事等について非常にわかりやすくお話をして頂いた。特に岩本社長が総括を務められた紛争後のブルンジにおけるコミュニティ開発支援に関して、ブルンジの厳しい情勢やプロジェクトの立ち上げ、そして各パイロットプロジェクトの詳細までわかりやすく説明され、参加した学生達が真剣に聞き入っていた。

昨今不況にあえぐ日本社会においては途上国支援について否定的な感情を抱く国民がいることは否めないが、かつて日本は米国から約12兆円もの資金援助を受け、東海道新幹線や東名高速道路をはじめとするインフラを整備し、戦後からの復興・経済発展を成し遂げたために現在の日本があることを常に忘れてはならないと岩本社長は力説された。戦後様々なドナーから支援を受けた恩を、今アフリカに対し農業・農村開発支援という形で返しているという気持ちでアフリカ各国における業務に臨まれているというお話がとても印象的であった。また、岩本社長は恩師からの言葉：「農学と工学は Applied Science=応用科学であるため、これを学び人と社会の為になる仕事を行ってほしい」を胸に、常に恩師や先輩等専門技術者になるためにお世話になった方々への感謝の気持ちを忘れずに途上国の人々に接していると言う。特に岩本社長は国際協力に従事する中で、人および情報のネットワークの構築は最も重要であると言われた。「縁と運」および「出会いと機会」を常に大切にし、構築されたネットワークの維持や拡大に努めなければならない、との岩本社長のお言葉は深く聞いているものの胸に響いたことだろう。

【現場からの報告】

「ザンビア国小規模灌漑開発プロジェクト」
～農業農村開発分野における開発コンサルタントの取り組み事例～
家泉 達也（株式会社三祐コンサルタント）

第二部ではコンサルタントや JICA 専門家の立場から、海外農業農村開発の現場の活動の様子や、現場で求められる資質について発表が行われた。

三祐コンサルタントの家泉達也氏は、「ザンビア国小規模灌漑開発プロジェクト」～農業農村開発分野における開発コンサルタントの取り組み事例～ と題して、ビデオ出演によりプロジェクトの活動報告を行った。プロジェクトでは、生活向上の一環として、日本古来の技術を用い、また現地で調達可能な土や、木、草などを利用して、現地住民と一緒に簡易堰の設置を実施していた。また、恒久堰の導入にも力を入れている事等を報告した。これら報告では、現地での活動の苦労や工夫についても紹介をした。

「国際協力の仕事を目指して思っていた事。」

栗原 一寿（JICA 専門家）

JICA 専門家、栗原一寿氏は、「国際協力の仕事を目指して思っていた事。」をテーマに、大学在学から現在従事するカメルーン国ネリカ米の普及についての期間に、国際協力活動において自分自身の感じたこと、およびどのような体験をしてきたかを説明した。これら経験により得られた教訓としては、「何をやるかではなく、どれだけやったか」など、また活動において気を付けていた事などを報告した。最後に今後、国際開発を目指す学生にメッセージを送った。

【パネルディスカッション】

東京農業大学局員教授の西牧隆壯氏による進行の下、パネリストとして日本大学生物資源科学部教授の倉内氏、開発コンサルタントとして石垣氏（アイ・シー・ネット）、弘重氏（オリエンタルコンサルタンツ）、椎本氏（日本工営）が登壇、各人の経歴、国際協力を目指したきっかけを述べた後、セミナー参加者からの事前アンケートや Twitter からのオンタイムのツイートに対して討議が行われた。

事前アンケートや Twitter からは、農村開発における環境問題への配慮、現地農家とのコミュニケーションの必要性など開発現場に関する質問のほか、学生のうちから取り組むべき経験、勉強など国際協力人材となるために必要となる具体的な資格・資質に関する質問があり、各登壇者から回答が述べられた。また、石垣、椎本両氏からは、女性職員からの意見として、開発コンサルタント業務には家族の理解や協力が必要不可欠であること、開発コンサルタント会社における育児のための勤務制度が整いつつあることを挙げ、国際協力は女性が活躍できる場であることを強調し、女性の積極的な参加を歓迎した。初の試みとして行った Twitter での質問は、コンサルタント業界の給与体系など、Twitter ならではの知りたくても聞けない質問が挙げられ、セミナーに参加した各社社長自らがツイートに対して回答するなど討論に盛り上がりを見せた。

【セミナー写真】



来賓挨拶（宮崎室長）



基調講演（ポリコ所長）



Twitter を用いたパネルディスカッション



パネル展示・学生個別相談